

小豆島 迷路のまち

孤高の俳人・放哉さんも歩いた
土庄・迷路のまち。

「迷路のまち」とは

この地区の個性的な町並みは、
・海賊から島民の生活を守るため
・海風から建物や日常生活を守るため
に意図的に造られたと言われています。
複雑な路地が「迷路」のようであること
から、いつの頃からか「迷路のまち」と呼ばれるようになりました。
「迷路のまち」は、土庄町の中心部に位置し、小豆島八十八ヶ所霊場第五十八番札所西光寺周辺の、昔懐かしい町並みが残っている地域のこです。

10 四橋荒物店

TEL0879-62-0051
FAX0879-62-0051
E-mail kyhosai@mx8.tiki.ne.jp
店主/四橋 一男 (4代目)
屋号/秀茂
創業年/明治20年頃
店舗建築年/昭和10年頃
●一店一室…小豆島で唯一(おそらく)の荒物店としての独自の商品を考えています。

竹藪に夕陽吹きつけて居る

放哉にしては珍しい単々と詠んだ写生句である。竹藪にやがて落ちていく夕陽のはかなさに、これからの自分の行き方に思いをいたし、ふと、ふるさと鳥取の風景を思い浮かべているのかも知れない。(記念館に短冊有)
(層雲大正15年1月号「島の明けくれ」より)

4 エスポアおおもり

TEL0879-62-1306
FAX0879-62-2772
E-mail donisbar@gmail.com
店主/大森 裕樹 (4代目)
屋号/熊太郎
屋号のいわれ/当業大森熊太郎の名による
創業年/明治31年
●一店一室…創業時に当時の香川懸小豆郡役所より熊太郎がいただいた小賣行商の本製糺
●一店一品…造り手の情熱が伝わる本物の清酒、ワインなど

山の和尚の酒の友とし丸い月ある

「酒はほどほどがよろしく……」西光寺住職杉本玄々子の言葉である。放哉は在庵中しばしば酒で失敗、それを物心両面にわたって支えてくれたのは玄々子である。飲んではいけない酒を大らかに付合してくれる事に、放哉は人間の暖かさを感した。(山は土山の事であろう)
(層雲大正14年11月号「足のうら」より)

小豆島 尾崎放哉記念館



8 味を語る 長栄堂本店

TEL0879-62-0055
FAX0879-62-5808
E-mail info@choeido.com
店主/岡田 好平 (7代目)
屋号/長栄堂
屋号のいわれ/いつまでも元気な店であるようとの願いをこめて

創業年/慶応3年
店舗建築年/大正8年
●一店一室…ソフト お客様の歡びを私達の歡びとしたい
●一店一品…放哉だんご

入れものが無い両手で受ける

何を貰ったのか、諸説さまざまで「かやくご飯のお握り」「豆腐半丁」「豆」「果物」などとも言われているが放哉が貰ったのは「物」そのものではなく、持ってきてくれた人の「心」であり、それを感謝して受ける気持である。
(層雲大正15年2月号「野菜根抄」より)

1 靴のカマダ

TEL0879-62-0043(1号店) 62-0235(2号店)
FAX0879-62-6375
E-mail kamada-h@tiki.ne.jp
店主/鎌田 久司 (3代目)
店舗建築年/1号店 平成元年 2号店 昭和40年頃

●一店一室…代々伝わる下駄、草履のスケ台
●一店一品…和装のおはきもの、次第になくなりつつある下駄、草履をかつての鎌田履物店としてコーナーに!

海風に筒抜けられて居るいつも一人

「小さい庵でよい…海が見えるともっとよい…」師の井泉水に依頼した条件にピッタリの南郷庵であったが、地位も名誉もふるさとも、妻をも捨てた放哉は、それが自分の意志であったも、その孤独はおおうべくもなく、海風に筒抜けられて居るのは放哉の「心」であり、その淋しいが「いつも一人」の中にこめられている。
(層雲大正14年11月号「足のうら」より)



1 靴のかまだ 2号店



9 ひよこ食堂



11 米専ばんすけ



6 池本芳栄堂



5 元屋商店



10 四橋商店



8 岡田長栄堂



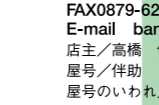
7 笠井電気店



3 木村米穀店



11 高橋伴幸商店 米専ばんすけ



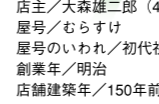
窓あけた笑ひ顔だ

「海が少し見える小さい窓一つ持つ」一南郷庵の8畳間にある小さい窓、その窓を開けて世話してくれているおシゲさんの笑顔が見えた。しかし放哉が見たその笑顔はおシゲさんではなく、窓の下に生えている雑草であったのではないだろうか。春を待つ心境がよく出ている句である。
(層雲大正15年4月号「佛とわたくし」より)

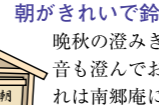
2 合資会社 柳屋商店



12 craft あいびい (手作り雑貨の店)



7 笠井電気・たね



朝がきれいで鈴を振るお遅路さん

晩秋の澄みきった朝、リンリンと鈴を振る音も澄んでお遅路さんが近づいてくる。あれは南郷庵に来るのだろうか、「お遅ー丁! 家内安全!」と練習してみる。早く春が来て大勢来ないか、放哉の体は今朝は咳も止まり気分も良い。
(層雲大正15年2月号「野菜根抄」より)

6 池本芳栄堂

TEL0879-62-0326
FAX0879-62-0326
店主/池本 昌祐 (2代目)
屋号/芳栄堂
屋号のいわれ/いわれではありませんが、初代の名前の1字を取って付けました。

創業年/61年前
店舗建築年/昭和40年
●一店一室…町の小さな菓子屋ですが、大型店のようにたくさん作れませんが、親子でたくさんまごころこめて作っています。
●一店一品…水曜日のシュー畑 10月~5月末 スフレプリン 6月~8月 夏は特製コーヒーわらび餅

山は海の夕陽をうけてかくすところ無し
「障子あけて置く海も暮れ切る」初秋の海はおだやか、大自然の中さんさんと降りそそぐ海の夕陽も、やがては落ちる。人間として例外ではない。一見明るい句であるがその裏に放哉の運命を暗示しているように見える。朝日ではなく、夕陽としたところに放哉の心境がよく出ている。
(層雲大正14年12月号「島の祭」より)

5 元屋商店

TEL0879-62-0109
FAX0879-62-5617
E-mail harada.m-230@tea.ocn.ne.jp
店主/原田 保 (5代目)
屋号/元屋商店
屋号のいわれ/元屋源九郎と言う名の人が出発点
創業年/文政12年 (1823年)
店舗建築年/100年前
●一店一室…古い醤油蔵
●一店一品…伝統に育まれた味と香り さしみ醤油「元」

あらしがすっかり青空にしてしまった

大正14年11月16日付玄々子あての手紙に「風が中々キック吹きます…」とあり、「ヒドイ風だ、ドコ迄も青空」という句を送っている。これはこの句を推敲したものだろう。庵のスキ間から入り込む風の音が庵をゆらし、それを「あらし」と表現した。風が雲を散らし青空になった事で、放哉の心もすっかり晴れた。
(層雲大正15年1月号「島の明けくれ」より)

3 お米のキムラ 木村米穀店

TEL0879-62-3857
FAX0879-62-3867
E-mail kiras@olive.plala.or.jp
店主/木村 文夫 (4代目)
創業年/明治より
店舗建築年/平成10年
●一店一品…オリーブ茶、オリーブソーマン、手延べ半生うどん

春の山のうしろから煙が出だした

放哉は大正15年4月7日、南郷庵の2畳の間で亡くなった。その時頭は入口の方に向いていた。煙は当時あった火葬場の煙である。風の向きによってその煙や匂いが放哉の枕元までくる。だから、「うしろからの煙」は、放哉の頭のうしろからであり、一筋の白い煙は、やがて自分を焼く煙と考えたかも知れないし、あるいは「生きたい」という生へのあこがれの煙であったのかも知れない。
(層雲大正15年6月号「最後の日記」より)

●発行 土庄町商工会
迷路のまち再開発実行委員会
●協力者 層雲同人 井上 泰好